待ってるよ

大沢　綾子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

待ってるよ

【Ｎコード】

Ｎ９００６Ｉ

【作者名】

大沢　綾子

【あらすじ】

秋月ひかると恭一の短編、第三段。

しかし、こんなに意味のない、オチのない話ばっかり……。まったく、もう、と作者でさえ思います。

なにかが足りない……。
夏の気配がすこしずつ消えていくのを感じながら、秋月恭一はそう思う。
新学期も始まった。夏のあいだに、だいじな恋人も手に入れた。中学生のころから憧れた人は、幾つになっても可愛くて、毎晩でも食べてやりたいぐらいだ。
その恋人ひかるとは一緒に暮らしている。恭一からいえば祖父母、ひかるにとっては両親を5年前に亡くし、いままた恭一は両親を、ひかるには兄夫婦を事故で亡くしたからだ。
お互いのほかにはもう、秋月の名前はなくなってしまった。そして、天涯孤独となった恭一のために、ひかるは同居しはじめたが……それがいつしか、恋人同士になった。今のひかるは、一時他人に貸していた実家をそのまま売って、恭一の家に完全に越してきてくれた。住民票も本籍も、変更した。
朝は腕のなかで眠るひかるの顔を眺め、夜はそのベッドで熱く愛し合う。
しかし、なにかが足りない。

朝食のテーブルで、新聞を読むひかるを見ていると、やはり社会人だな、と思う。
恭一はまだ高校二年生だが、彼の血のつながらない叔父秋月ひかるは研究所に勤務する研究員で、25歳になる。が、外見からではまだ学生にしか見えない。
185の上背と85キロの体重をもつ恭一に比べてひかるは、背はやっと170に届くかどうか。華奢で、丸いふちなし眼鏡が愛嬌のあるかわいい顔をしている。性格もおっとりとしてやさしい。そ

のくせ、合気道なんかをやっていて、いざとなれば恭一でさえ投げ飛ばす。そのアンバランスさが、さらに可愛い。
　恭一はもう、ひかるの事ならすみずみまで知っている。どこを、どうすれば甘い声をあげるか、嫌がりながらも受け入れるか。
（ああ……やりてぇ）
　朝っぱらから、鼻血がでそうになっていた。
　気を逸らそうと読みたくもない新聞紙面のパック旅行の広告を見ていて、気がついた。
　俺たちは、新婚旅行をしていない！！
「ひかる、新婚旅行にいこう！」
　ついでに、結婚式のまねごともやりたい。
「あ、朝っぱらから、なに？」
「新婚旅行だよ。な、いいだろ？　夏休みに行こうって言ってたのが、怪我で流れちまったじゃないか。行こう！」
　ひかるは、研究所の夏休み中ずっと左手首のひどい捻挫でなにも出来ない有様だった。それはそれで、恭一にはひかるの世話を焼くたのしみを満喫できて楽しかったが、やはり、ふたりで旅行をしてみたい。
「……恭一くん」
　ちょっと、声を落とした溜息まじりのひかるの呼びかけに、ぎくり、とする。
「きみ、休み明けの学力テストの成績、わかってる？　僕はこれでも、ものすごく責任を感じてるんだよ。あんなに成績良かったのに、あんなボロボロのテストを持って帰ってくるなんて……。これからが一番、恭一くんにとって大事な時期なのに」
　そう、それでひかるは一時期もう、セックスしない、家を出ていくとか御託をならべていたのだ。
「いや……あれは」
　恭一は、しどろもどろになる。
「真面目にやらないと、僕だって知らないから。きみはとっても素

敵だし、僕だって大好きだけど……その辺の三流大学行くなら、考えるからね」
頭の出来に関しては、恭一もいまのひかるに頭があがらない。なにせ、生物化学学科をトップ卒業した脳みその持ち主だ。
「できる頭をもってるんだから、なおさらだよ」
ベッドのなかでは、とても甘くて素直でかわいいのに、こういう時だけいきなり年上になるから、恭一も困る。
「絶対に、だめか？」
「中間テストの結果で決めるよ」
そうきたか。
仕方なく、恭一はその条件を受け入れた。

中間テストの結果はなんとか及第点。
ひかるに言わせれば、もう少し頑張れるはずなのに、となるのだが、そこは少し甘い点をつけてくれて、一泊の温泉旅行に出かけることになった。ちょうど、観光シーズンで天気にも恵まれて、ちょっと鄙びた温泉地でさえ観光客でいっぱいだ。
宿帳をつけていると、案内してくれた仲居さんがやさしい声で「ご兄弟ですか」と聞き、恭一に向かって「お兄さん」と言ったものだから、あとでひかるが大むくれにむくれた。
それも、夕食までのあいだ温泉街をぶらぶらと散歩しながら店先をひやかしているうちには、おさまった。
夕食の膳には、海の幸、山の幸が盛りだくさんで、珍しくひかるは銚子を2本、空けた。
湯上りのうえに満腹で、おまけに酒がはいって胸のあたりから、ぽう、と桜色に染まったひかるは、このうえなく色っぽかった。
(うおぉぉおお！　やっと、新婚初夜！)
もう、煩悩刺激されまくりだった恭一は、とにかく早く寝床にひかるをひっぱりこみたくて、フロントに片付けをせっつく電話をか

けていた。

酔っ払ったひかるは、凄くいい。
ちょっとかわいい上品さで、エロい。
普段はやはり理性が邪魔をするような格好でも、喜んで見せてくれる。
恭一は、だいぶ酔いのさめたひかるの胸に頭をあずけて、大丈夫か、と訊く。
「うん……なんか、身体バラバラになりそう」
「ごめん、加減できなかった」
恭一はすこし、後悔していた。途中から、ひかるの快楽ではなく、自分の欲望を優先してしまったからだ。
自分がもっと大人で経験があったら、ひかるを労わってやれたろうと思う。
「ひかる……俺、頑張ってはやく、ひかるに釣り合うような大人になるから」
そう言うと、ひかるがやさしい笑い声を夜のなかに響かせる。
「馬鹿だなぁ。僕はもう社会人だから言うんだけど、学生でいられるのは一生のうち、たったの一度だけなんだから、大事に楽しまなきゃだめだよ」
「……でも、俺は」
まだ、自分の稼ぎもない高校生であることが、たまらなく辛かった。頭をもたげてひかるの顔を見ると、微笑していた。手がのびてきて、恭一の髪にゆびをからませる。
「僕が……ゆっくり歳をとるから。ちゃんと、待っててあげる」
その言葉に、恭一は思わず涙がでそうになっていた。
「ひかる……俺、一生おまえを愛するから」
そうして、恭一はひかるの肩に額をおしつけて、強く抱きしめていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9006i/

待ってるよ

2010年10月8日15時25分発行